

# 自然観察を通して自然保護思想の普及啓蒙

かがわ自然観察会  
(香川県自然観察指導委員連絡会)

## かがわ自然観察の生い立ち

S.59.11月に「香川県自然観察指導員連絡会」として発足。当初は、指導員としての研修を主体としていましたが、現在は一般への自然観察指導を通じた普及啓蒙活動を中心とし、呼称も一般になじみやすい「かがわ自然観察会」に変え、8年目の活動中です。会員の構成は、(財)日本自然保護協会自然観察指導員、環境庁自然公園指導員・ボランティア解説員、香川県自然観察講座受講者など会の趣旨に賛同する個人約100名（社会人で職業は自営業・会社員・教員・公務員・主婦など多岐にわたる）で構成されています。

## 活動の目的

活動の目的は大きくわけて次の二点にまとめられます。

### (1) 会員の自然・自然保護に対する資質の向上

私達は自然保護思想の普及啓蒙のための手段として自然観察会運動に取り組んできました。しかし、依然として『自然観察会＝理科のお勉強』、植物なら大丈夫だけど野鳥のことはからっきし駄目！専門外はのことはわからない…などという指導に対する誤った認識が指導員の中に存在しています。このことが自然観察会には関心があるけれど指導者として参加することが怖いという状況を作り出しており、この運動の発展を阻害している最大の原因となっています。

私達はまず指導員自身が自然を《全体》として、また知識ではなく《感覚から共感できる》ものとして接することができるように研鑽を積む必要があると考えています。

### (2) 自然観察会などを通じて自然保護思想の普及啓蒙

どんなに立派な自然保護論であっても自然に対する共通の価値観の下でなければ相互理解は生まれえないのではないのでしょうか。とくに近年、自然に対する

要求はこれまでにないほど高まりを見せていますが、同時に文明生活の進展にともない自然体験の著しく欠如した世代が増えていることも事実です。また、アウトドアレジャーや自然についての知識は豊富でも、そのことと私達の生活がどのように関わっているかといったことについての認識が薄いことが、「地球規模での環境危機」という問題解決の上で大きな隘路となっています。私達は、まず共通の自然感を共有できる人達を一人でも多く増やすことが「遠くても近道」と考え、「いつでも どこでも 自然観察」をキャッチフレーズとして自然観察の輪を広げていきます。

## 活動内容

### (1) 自然観察会行事

- ・瀬戸内海国立公園の利用拠点である屋島・五色台などを中心とした自然観察会「キャッチ・ザ・自然」（年2回）や自然体験キャンプ（国民休暇村と共催・年4回）の実施
- ・環境週間に行なう全国一斉自然観察会（（財）日本自然保護協会と共催）の実施
- ・「四季の自然観察会」（香川県からの委託・年4回）の実施

### (2) 定例会

毎月第2木曜日に県青年センターで定例会を開催し、会員分担による月例研修ならびに会の運営や行事についての打ち合わせを行なっています。

### (3) 研修会

多様な自然の姿を知り、健全な自然観を育むために県内外で年3回程度会員を対象とした研修会を開催しています。

### (4) 会報の発行

会報『ネイチャー・ウォッチング』（年12回）を発行し、会員間の連絡調整・親睦を図るほか、全国の自然観察関係団体（40団体）と会誌交換を行ない相互交流に努めています。

以上のような定例的行事に加えて、TaKaRaハーモニストファンドの助成を受け次のような活動取り組みを行ないました。

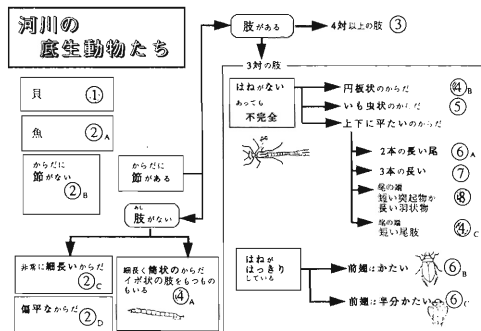
#### (a) 自然観察リーフレット『屋島の自然』の作成・印刷

毎年瀬戸内海国立公園『屋島北嶺』で自然観察会を実施していますが、自然情報の蓄積もできたため、S.62年に作成した『5色台の自然』の続編として『屋島の自然』を作成しました。このリーフレットは、自然観察会参加者の資料とするほか一般利用者にも配付され自然公園適正利用の一助として有効に利用されています。（→参照1.印刷成果物）

#### (b) 自然観察会用「フラッシュカード」の作成

観察の補助具としてフラッシュカードを整備しました（カードは耐久性を高

めるためラミネーターによってラミネート加工されています)。現在、水生動物やセミのぬけがらの検索カードなどを作成活用しています。(→参照2. ラミネート成果物)



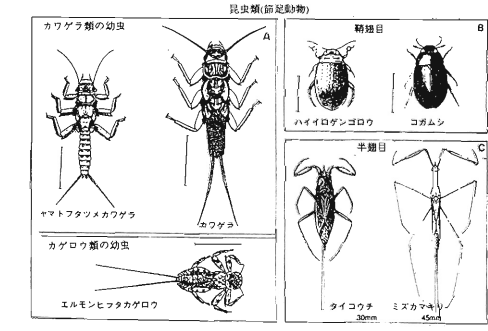
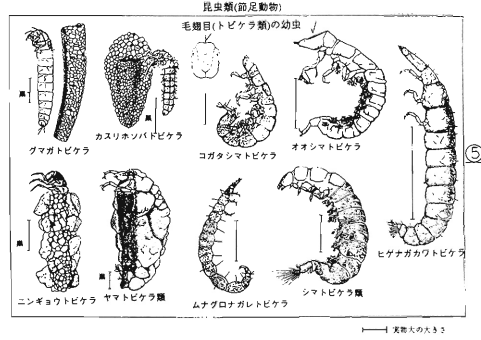
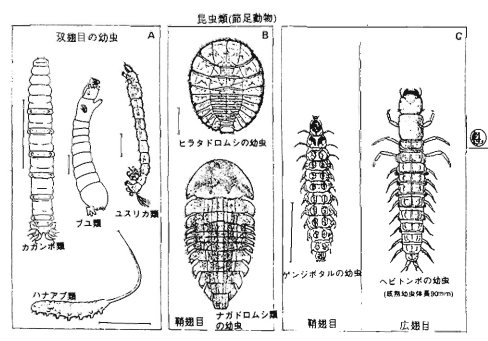
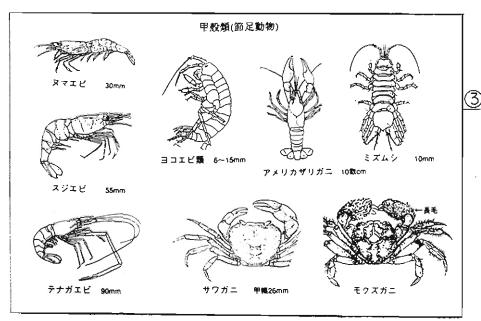
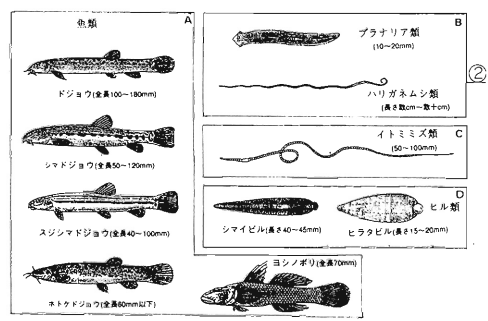
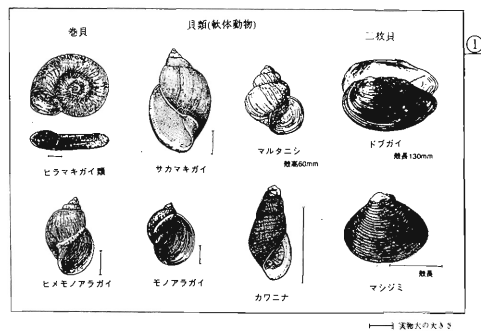
### 河川の底生動物検索カード

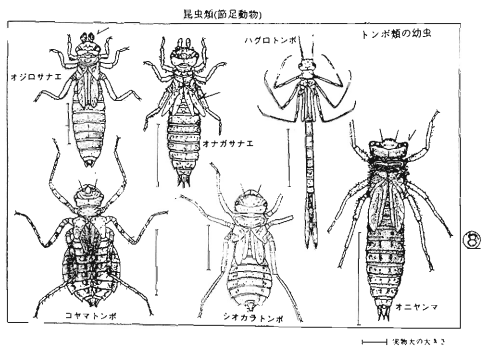
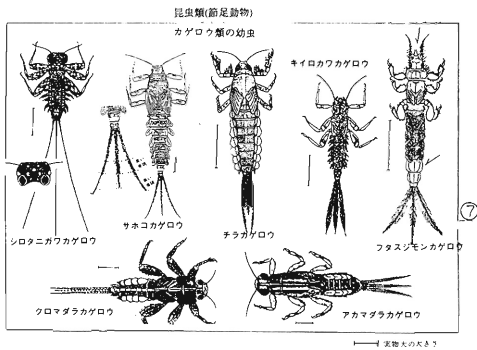
参考文献

川合橋次 他	1967	川の動物	東京理科大学	動物学	学習研究社
岡田 賢 他	1971	新日本動物図鑑	上, 中, 下		北隆館
奥谷壽司・渡部志平	1975	学研中高生図鑑8	川		学習研究社
津田松苗	1962	水生昆虫学			北隆館
津田松苗・森下節子	1976	生物による水質調査法			山海堂
津田松苗 他	1973	日本幼虫図鑑			北隆館
井上 巖	1969	蔵形虫類	動物系統学	動物学	中山書店
吉良哲明	1971	藍色日本貝類図鑑			保育社

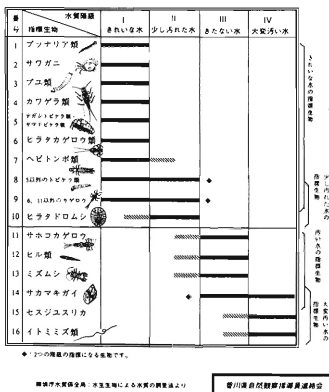
水質浄化は足元から  
洗濯・食器洗い・シャンプー……身近なくらしの見直しを

主催者: NACSJ  
香川県自然観察指導員連絡会





川の水生物で調べる水のよごれ



(c) 身近な自然の写真展

香川県には尾瀬や知床のようなWildernessはありませんが、いま大切なことは身近なありふれた自然の中にも美しさを見つけられる感性そしてそんな自然とのより良い関係を再構築する生活力でないかと考えています。こんな思いをこめて初めての試みとして「見近な自然写真展」を開きました。会員が撮りためていたスライドを引き伸ばし、緑の県民祭り会場と高松市内のギャラリーを使って2回展示し地元新聞のコラムに取り上げられるなど反響を呼びました。(→参照3. 写真1~6)

(d) ドングリ苗の育成・植林活動

香川県沿岸部はほとんどマツ林が現在植生として卓越していましたが、近年の松くい虫被害によって枯損が著しく進んでいます。会の活動拠点ともなっている五色台や屋島の自然観察路の周辺には疎林化したエリアが多くなってきました。自然の植生遷移に従えばマツ林→落葉広葉樹林となるはずですが、疎林化したエリアの一部にはツル植物の繁茂により遷移の進行が妨げられているのが現状です。

松くい虫による枯損という直接的現象よりもこの松枯れの背景にある森林と人間生活の係わりの疎遠化という自然保護を考えるうえで放置できない問題になんらかのアクションをおこしたいと考えました。とりあえずは一昨年秋に会

員でドングリを集め苗畑をおこし苗づくりに取り掛かりました。今年になって私達の活動内容をベースに行政の方でも「ドングリ銀行」制度をスタートさせ、たくさんの預金者の参加を得て、この度屋島北嶺園地へドングリ（クヌギ・コナラ・アベマキなど）の苗を植樹しました。今後もこのような子供達の自然観察に適したエリアの造成を継続して取り組んで行きたいと考えています。（→参照4. 写真7～10）

## これからの活動

最近になってようやく我が国でも環境教育の必要性が論議されはじめました。小学校で指導要領が改訂され生活科が実施されたり、文部省から環境教育の教師用資料集が発行されています。

R.カーソンの『センス・オブ・ワンダー』という本の中に

「知る」ことは「感じる」ことの半分も需要でないと固く信じています。

子供たちが出会う事実の一つ一つが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、様々な感情や豊かな感受性は、この種子を育む肥沃な土壌です。幼い子供時代は、この土壌を耕すときです。

という一文があります。いわば素人がボランティアではじめた自然観察会活動ですが、8年を経過して色々なノウ・ハウが蓄積してきました。未来ある子供達にしっかりとした自然観・環境観を持ってもらうためにTaKaRaハーモニストファンドでいただいた温かい助成を基礎にさらに関係各方面との連携を深め研鑽を積んでまいりたいと考えています。（文責：大石泰輔 副会長）



▲木の中の水の流れを聴診器で音を聞いているところ  
※木も生きていることを観察するもの



▲自然観察会でススキを利用しフクロウを作ったところ





▲自然観察会でミノムシを作ったところ。(落葉で)



▲どんぐりの記念植樹

